

稲川利光(著)

生き生きケア選書
老人ケアの元気ぐすり

“心の元気”を吹き込む
「ケアの元気ぐすり」

村上重紀

(御調町保健福祉総合施設付属リハセンター, OT)

「身体拘束ゼロへの手引き」が厚生労働省から発行された。介護保険法の施行に伴い、介護保険施設におけるケアの質の向上を促すためである。「拘束」とは貧しいケアの象徴である。だから、「なにが、またどこまでが拘束なのか？」という議論はまるで意味がない。さまざまな理由や形で行われている「拘束」の実態を直視し、その検証を通して、高齢者の人権やケアの意味を問い直す意識と、現場での「拘束ゼロ」への取り組みこそが肝要なのだ。本書『老人ケアの元気ぐすり』はそうしたケアの意味を、しかし理屈ではなく身をもって示してくれる楽しい実践レポートであり、情感豊かなりハビリエッセイである。

著者の稲川利光さんはPT(理学療法士)として病院・地域で活躍し、その後医師を目指して医科大学に入学し、40歳を超えてから医師になった人である。その経歴も異色だが、もともと人間が異色なのだろう。そのことはPT時代に、「ET」(Entertainment Therapyの略)という新語を掲げ、「つらく苦しい機能訓練ではなく、明るく楽しいETを」と提唱し、お年寄り、家族、セラピストが共に楽しみながらすすめる新しいリハビリの形、いわゆる“遊びリテーション”の先駆的な実践を積み重ねてきたことからもうかがわれる。

本書には、そのET医師が、自らの原風景である祖父との生活を出発点に、患者さんや隣人や家族との生活感あふれる交流を語ったケアレポートや自伝的なケアエッセイが収録されている。読者はその軽妙にして滋味に満ちた語り口に引き込まれ、時に笑い、時に涙するうちに、ETの世界を、生き生きケアのありどころを知るのである。

本書はII部構成で、それぞれ10章からなっている。I部は書名と同じ「老人ケアの元気ぐすり」で、主にケアや医療の現場からの実践レポートであるが、「人の



生活あるいは人生をどう支えていくのかがリハビリテーションである」という著者の熱い思いが貫かれている。特に10章「塩田さんの生きる力」は、人と人との関わりが生きる力を引き出し、支えること、そうした関わりこそがリハビリテーションの本質であることを如実に物語り、言を持たぬほどに印象的である。

II部は「寄り道人生リハビリ航路」で、タイトルからもわかるように、これは著者のユーモアあふれる自伝的、昭和史的、かつ体験的ケア論である。稲川少年と祖父母、そしてその死。自己のルーツを探る中国への旅。PTや医師を目指していた頃のさまざまな人々との交流が語られる。なかでも、貧乏医大生だった頃に住んでいたアパート「たそがれハイツ」の隣人であるばあちゃんたちとの物語はペーソスがあふれていて味わい深い。

「自分と患者さんとの互いの関わりを大切にできる医療を」と願う医師としての再出発(本書の最終章)まで、どの章からでも楽しめる。「城野のばあちゃん」や「祖父のしびん」「かたばみの花」などの各章は、本質的には体験的ケア論であるが、どれも読み物としても秀逸である。文章だけではなく、挿入されている写真もいい。さらに著者自筆の感性豊かなイラスト(スケッチ)がまたいい。多才にして多彩なワールドを、高齢者ケアに関わるすべての人たちに是非楽しんでもらいたい。

「ケアの元気ぐすり」。この「ぐすり」には、ケアのマニュアル本にあるような副作用がない。読者は本書から不思議な“心の元気”をもらうに違いない。もらった元気を、私たちはお年寄りにも渡したい。お年寄りはまたその元気を私たちに返してくれるのだ。

● B5変形 頁200 定価(本体2,000円+税)

〒400 2001 医学書院・刊